一般病院小児病棟における訪問教育の現状と問題点
－当院を例に主として患児側からの検討－
(分担研究：慢性疾患児の効果的な支援方策に関する研究)

細谷　亮太

要約：病気というハンディキャップとたたかいながら、病棟である期間生活をしなければならない慢性疾患をもつ子ども達によって、院内での教育はどのようにとらえられていて、どのような意味をもつものであろうかを考えた。ほとんどの子ども達は入院中の教育を好ましいことと考えているが、個別の教育を望んでいる傾向がみられた。達成感を感じることができるような授業を主体にした、その子にあった教育が行われるべきである。

見出し語：院内教育、訪問教育、小児慢性疾患

『研究目的』

こども達は、身体のみならず精神も、日々成長発達を続けている。

慢性疾患児は病気とつきあいながら、育たなければならないというハンディキャップを背負っている。

入院している慢性疾患児にとって、親や兄弟姉妹との愛にあふれた遊びの時間と、知的好奇心を刺激し、かつ、みたしてくれる学習の時間が必要なのにそうできない現状は周知の事実である。現状を改善することができれば、そのハンディキャップをいくらかでも軽くすることができるのではあるまいか。

『研究方法』

筆者は慢性疾患児、および家族の病棟におけるクオリティオブライフ向上のために教育との関係どのような設備と人員が必要かについて昨年、筆者の勤務する聖路加国際病院小児科病棟において調査を行った。

環境の調査とともに、訪問教育に訪れている教員への聞きとり調査もあわせておこない施設環境、人員に対する様々な問題点を（詳細については昨年度報告書参照）指摘した。

今年度は、悪性腫瘍患児を中心に入院していて訪問教育をうけている子ども達自身に個別に面接を行い、子ども達が何を欲しているかを調査した。

聖路加国際病院小児科：Department of Pediatrics, St. Luke's International Hospital

○今後　望むこと

- 教室はいらないが図工や理科はみんなでやりたい　⇨“教室が欲しい”
  (小)
- いやな教師は始末がわるい
  (中)
- しっかり勉強を教えて欲しい
  (中)
- 好きな科目だけをやって欲しい
  (小x2)（中x2)

『考察』

○小学生は皆とワイワイやることの方を好んでいる傾向があった。中学生はじっくり教えてもらえることを評価するものと、いやな教師とのマンツーマンは、やっていられないという者の２群にわかれた。

○それをうけて教室が欲しいというものが結構いた（両群ともに）

○学校は楽しまれている　特に小学生
図工　理科実験
調理実習など

『おわりに』

入院している子ども達が、自分の病気に積極的に対処できたり、自からストレス反応を軽減したりできることは、ＱＯＬを高める上でもきわめて重要なことである。

最近、武田等は院内の教育で得られる到達感が、それを実現する手段となると報告している。院内の教育を子ども達の望む方向で発展させることは大切なのではあるまいか。

『文献』

武田鉄郎、原　仁。慢性疾患で入院している子どものセルフ・エフィカシー（自己効力感）に関する研究、小児の精神と神経　特集“入院児のＱＯＬ向上を目指して”、1997;37(1)71-78

聖路加国際病院　在籍児童・生徒 一覧　(1995年度~1996年度)

東京都立墨東養護学校　1997. 1. 24

No	児童・生徒名	学年	在籍期間																								
			1995年度(平成7年度)													1996年度(平成8年度)											
			月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
1	[illegible]	小2		5																						
2	[illegible]	小6		1								25														
☆3	[illegible]	小3, 4			29					11											12~26					
4	[illegible]	小4, 5								17		26					12~26									
☆5	[illegible]	小1~2									24				23											
6	[illegible]	小3												26	5											
7	[illegible]	中3					6																			
8	[illegible]	中3							1																	
9	[illegible]	中2					20		27																	
10	[illegible]	中2~3											22												13	
11	[illegible]	中1~2											22													
12	[illegible]	小3														8									7	
☆13	[illegible]	小2															1					12				
14	[illegible]	小3															14									
15	[illegible]	小3																			3			22		
16	[illegible]	小3																					12			
17	[illegible]	小1																						5		
18	[illegible]	中1														9									21	
19	[illegible]	中1																				2				
20	[illegible]	中1																				18				
在籍数 (各月1日付) (人)		小学部		1	1	2	2	2	2	2	2	3	1	1	2	2	1	3	3	3	3	4	4	4	3	
		中学部		2	2	2	2	2	2	0	0	0	0	2	2	2	3	3	3	3	3	3	5	5	5	
		合計		3	3	4	4	4	4	2	2	3	1	3	4	4	4	6	6	6	6	7	9	9	8	

表中の数字は転入、転出日

平成７年度と８年度の２年のうちに地元の学校、墨東養護学校に学籍を移して訪問学級で授業をうけたものについて、入院生活の日常の中で負担にならないように、直接ききとりをし、また電話でも補足的な調査を行った。質問した主な項目は右の通り

- 訪問学級と今までの学校の比較
- ベッドサイドと教室での学習の比較
- 楽しめたか、存在の意義等
- 今後望むこと（教室等）

『結果』

在籍の生徒は別表の通りである。

小学生12人（男：女＝４：８）

中学生８人（男：女＝５：３）

うち小学生３人は他界しており調査不能

○訪問学級と今までの学校の比較	小学生	中学生
・今までの学校の方が良かった	3	4
・同じ	6	1
・訪問学級の方が良い	0	3
○ベッドサイドと教室での教育の比較		
・ベッドサイドが良い	4	2
・教室が欲しい	4	5
・わからない	1	1
○楽しめたか、存在の意義		
・学校はいる　楽しいから、役に立つから	9	8
・学校はいらない	0	0

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:病気というハンディキャップとたたかいながら、病棟である期間生活をしなければならない慢性疾患をもつ子ども達によって、院内での教育はどのようにとらえられていて、どのような意味をもつものであろうかを考えた。ほとんどの子ども達は入院中の教育を好ましいことと考えているが、個別の教育を望んでいる傾向がみられた。達成感を感じることができるような授業を主体にした、その子にあった教育が行われるべきである。